

# 馬鹿げたことが起こった

## 馬鹿げたことが起こった

ルカによる福音書二四章一一二節

柳 本 和 良

イースターおめでと〜ございます。受難節が終わり、イエスの十字架の苦しみを覚えるために暗い雰囲気だった教会も、今日やっと喜びに満ち溢れます。ところが朗読された物語は不穏な雰囲気を感じていました。この物語の中に、喜びはあまり感じられませんでした。

イエスが死んで三日目の明け方、女たちは遺体のある墓へと急ぎました。当時の墓は、岩山の洞窟のような空間に遺体を置き、大きな石で入り口をふさぐという形です。ところが着いてみると、閉まっているはずのその入り口が開いていた。中に入ってみると、あるはずのイエスの遺体がない。三日前、女性たちはイエスの遺体が墓に納められるときだけ、その場に近づくと出てきました。この目でどこに遺体が納められるのかわかり見届けたはずでした。見間違えようがない。あの時確かに見たんだから。安息日が終わったらすぐに香料と香油を遺体に塗ろうと思って。イエスが十字架にかけられた時、自分たちには「遠くに立って見ている」ことしかできなかった。近づくことができたのは死んだ後だった。もう、自分たちがイエスに出来ることで残されているのは、「終わった後のこと」ではない。でもせめてもの、それだけはやり返すことが出来た。他に何もできなかったか

日本基督教団  
 塚口教会  
 〒661-0012  
 尼崎市南塚口町  
 2丁目34-3  
 電話 06-6429-3019

ら。すべてが手遅れだったから。ところが、せめてものできることと思っていたことさ。彼女らは取り上げられてしまいました。文字通り「途方にくれ」ます。墓は空であり、遺体は「見つけれない」。それは決して、彼女たちを喜ばす出来事ではありませんでした。イースターの朝、一日が始まる明け方の時間、イエスの復活を、誰も喜んでいませんでした。復活されたとはつゆほども思わなかった。たとえ墓が空になっても。

突然、輝く衣を着た二人の人がそばに立ちました。女たちは一目見て、この怪しい二人の男がただならぬ存在であることを感じ取りました。恐れに顔に顔を伏せるといふ行為は、聖書の中でイスラエルの人が、「自分は聖なる存在と対面してしまった」と思った時、真っ先に取る行動でした。神と顔を見合わせたら死ぬ、という信仰が受け継がれてきたからです。さつきまで女たちは「途方に暮れて」いました。今度は命の危険を感じて「恐れ」ました。イエスの復活の日の朝、居合わせた者たちに真っ先に訪れた感情は、喜びではなく「戸惑い」であり、安心ではなく「恐れ」でした。

今日はイースターです。私たちは喜びに満ち溢れるはずですが、なのに、この日最初に訪れる感情は、戸惑いと恐れ。なぜなら、復活の出来事に立ち会った彼女たちは、イエスが復活するなんて思ってもみなかったから。

私たちは、本当に、救い主が復活すると信じているのでしょうか？この方が十字架にかかっているとき、死んでしまったとき、この方を慕っ

て付いて来た人たちは失望しました。呼びかけても答えない肉塊となり、この方はいつまでもたつても沈黙する姿となったからです。

「私」は、散々な目に遭った時、腹立たしい時、悲しみに暮れる時、沈黙し続ける救い主に失望します。時々皆さんからも質問されます。「神はなぜ、この世の中に理不尽なことが起こるのをお許しになるんでしょう？不公平なことばかりじゃないですか。富と力がありさえすれば、悪を行っても罰されないなんて。被害に遭ったはずの人が、声を上げたら攻撃されるなんて。何か特別悪いことをしたわけでもないのに、地震や津波であっけなく命を奪われるなんて。どうして神は、それを許すんです？なんで黙っているんです？」そして私も沈黙してしまいます。こっちは聞きたい。神に「なぜ？」って言いたいし、「なんとかして下さい」と詰め寄りたい。けど、たいていの場合私はそうせず、なんとか場を丸く収めようと言葉を紡ぎます。愚かにも「神の代わりに」応えようとしてしまいます。なぜなら、この方が沈黙したままだと思ひ込んでしまうからです。イエスはきつと答えないと、私自身が思いがちなからです。この方が現実を覆すとは思っていない。死んでいって思っている。

墓にイエスの遺体が見当たらないとき、女たちは途方にくれました。遺体さえもなくなくなってしまったと思いました。彼女らにとつて、イエスは物理的に「いなくなってしまう」存在です。呼びかけても答えてくれず、探しても見つからない存在となった。

私たちは、復活されたはずのイエスを必死で探します。「孤独や不安の中にいる人々」「災害や事故で悲しむ人々」がいるのに、あなたはどこにいますか？「政治に携わる人々に、今こそ正義と平和を愛する心が必要です。」けど、あなたはどこにいますか？「世界

中に教会があるのに、分裂してて、簡単に連帯できない状況です。」教会にさえあなたはいないんですか？どこにいますか？

今日、リタニーで祈った言葉を、私たちは普段祈りません。本当は心の奥底で諦めているからです。イエスを、答えてはくれない、沈黙し続ける死体と同じように扱っている。探しても見つからない、無くなってしまう遺体のように思っている。

ただならぬ輝きを放つ二人の男は言いました。「なぜ、生きている方を死者の中に探すのか？あの方はここにはおられない。復活なさったのだ。」

私たちは復活の主を探す場所を間違えていないでしょうか？ 孤独や不安の中に生きる人、災害や事故で悲しむ人が救われない状況に、神はいないと思っていた。けどもしかして、違う場所にいるのでは？それでも人々を励まそうとする輪の中に、支えようとする輪の中へと、復活の主は動き回っているのでは？政治が不安になっていく状況下、私たちは神を見つめることができずして、た。けどもしかして、分かりやすいリーダーにすべてを背負わせたい私たちにまず、正義と平和を愛する心を注ぎようとしていっているのでは？世界中に教会が分裂し、和解や連帯がなかなかままならない状況に、神を見出すことは困難でした。けどもしかして、神は小さなことから着々と進めようとしていっているのでは？私たちが些細に思っている、あの人やこの人の不和にまず、「誠実にあれ」と耳元でささやいているのでは？

イースターの朝、本当に馬鹿げたことが起こりました。救い主を死者の中に捜し、どこにも見つからないと嘆いている私たちに、動き回り続ける主が、その姿を現されたのです。

(二〇一九年四月二日復活節礼拝)